

『莊子』系孔子譚の選択

—『今昔物語集』卷十への臆説—

宮 田 尚

1

始皇による秦の建国譚にはじまる卷十は、帝王がらみのはなしにひきつづいて、いわゆる聖賢譚をかかげている。第十四話の費長房をはさむ、第九話から第十五話までの、孔子、莊子をめぐるのはなしがそれである。

これら聖賢譚は、いうまでもなく編成上の要請にもとづいて設定されたものである。そのことは、天竺および本朝部との対応関係からしてあきらかであろう。

すなわち、天竺部において卷十と対応するのは巻五であるが、ここでは第一話と第三話の帝王譚について、第四、五話に仙人譚が配してある。同じように、本朝世俗部においても、皇室譚が予定されていたとみられる卷二十一（欠巻）に接して、藤原氏に関するはなしが配されている。

天竺部における仙人譚と、震旦部における聖賢譚と、そして本朝世俗部における藤原氏関係話とは、帝王譚に接続しているというばかりでなく、後に武人譚をひかえているという点でも通じあっている。

「莊子」系孔子譚の選択 —『今昔物語集』卷十への臆説—

る。つまり「今昔物語集」は、これらを同一レベルのものとしてとらえているのであり、帝王→聖賢→武人という全体構想のもとに、卷十の聖賢譚を配しているとみられるのである。

さて、これ卷十の聖賢譚には、ひとつの、きわめて特徴的な傾向がみとめられる。費長房のばあいを除いて、他は「莊子」一色なのである。ことに、孔子を主人公とする第九、第十、および第十五話の三話が、もっぱら「莊子」の側の発想にかかるものであることは留意される。

周知のように、「莊子」はしばしば、孔子を批判することをおしてみずからの思想を展開させるという方法をとっている。したがって、そこではとうぜん孔子は否定され、あるいは邪揶されることになる。その、いわばコケにされた孔子像を「今昔物語集」は継承し、卷十の聖賢譚を構成しているのである。

たとえば、第九話「臣下孔子、道行、値童子問申語」では、道で会った七・八才ばかりの童子ふた組に、いづれもやりこめられ、「孔子ハ悟リ広クシテ不知又事不在サズトコソ知り奉ルニ、極メテ懐ニコソ在シケレ」と笑われる孔子が描かれている。童子に小馬鹿

にされては、いかな権威もかたなしである。

複話構成のこのはなしの最後の段で、垣から頭を出している馬をさして、「牛ノ頭ヲ指出タル」と弟子たちに謎をかけるくたりが、かろうじて孔子の面目を保つにしても、しよせんこれは、つけたりではない。主題はあくまで、標題に示されている「値童子問申語」である。

第十話「孔子、趙遙値采啓期聞語」では、いずこからともなく小舟に乗ってやってきた老翁の、自分とは対照的な心静かな生きかたに感銘して、漕ぎ行く舟の棹の音きこえなくなるまで礼拝して見送る孔子が描かれている。

第十五話「孔子、為教盜跖行其家怖返語」に描かれている孔子は、道理を説いて悪をさとすべく盗人のもとに説得に行ったものの、逆に論破されて逃げ帰るぶざまさ。あわてふためいた孔子は轡を取り損じ、鏡を何度も踏みはずす醜体を演じたため、後世、八孔子倒れVのことわざを生んだのであった。

聖賢譚は本来、聖賢の聖賢たるゆえんを説くのがすじであろう。むろん、その裏返しとして、聖賢の非聖賢の側面をとりあげることもしらざるを得ない。その意味では右の三話で、孔子の負の側面が強調されているとはいえ、これらが聖賢譚としての条件を失っているわけではない。

けれどもやはり、孔子に、つねに「莊子」の側から照明をあてているのは——そうした孔子しかとりあげていないのは、いかにも不自然だといふべきであろう。

この不自然さはなにに由来するのか。儒家の伝える孔子譚ではな

く、こともあろうに、思想的にあいまいでない道家の側の発想にかかるとのをとりあげたのは、いったいどのような事情によるのであろうか。

2

『今昔物語集』が、老荘の思想に同調する立場にたつ作品であるのなら、このような現象がみられるのはむしろとうぜんであり、なら異とするにあたらない。

けれどもじつさいには、思想的立場は、道家のそれよりも儒家に近いといつてよいだろう。話末の評語に示されている主張のうち、圧倒的多数をしめるのは崇仏の勧奨であるが、それを別にすれば、享受者へ直接はたらきかけている言葉は、おおむね人生訓、あるいは処生訓といふべき性質のものである。ちなみに、巻十におけるはたらきかけの言辭は、つぎのごとくである。

- (1) 道ノ辺ニ骸有テ耻カ□シク人ニ踏レムヲバ可埋隠シ(十四話)
- (2) 人ヲ恋ヒ悲ム心深クトモ、如然キノ事ヲバ不可為ズ(十八話)
- (3) 万ツノ事ハ、尚、此ク強ク可思キ也(二十九話)
- (4) 虚言ナレドモ事ニ随テ可云キ也
- (5) 年老タラム人ノ云ハム事ヲバ、可信キ也(三十六話)
- (6) 何事也ト云フトモ、年来ノ功入ラバ、如此ク可有キ事也(三七話)

「此ク強ク可思キ」とは、左右の手を斬られるほどの苦難に遭遇しても、なお、おのれの信するところを曲げない信念の固さをいふ。

他については、説明を要すまい。

死者へのいたわりの心をもて、たとへ愛妻でも邸内にほうむるな、信ずるところにしたがつて生きよ、時と場合によつては嘘も許される、古老の知識に学べ、というのは、具体的、かつ現実的な人生への示唆にほかならない。

他の巻でもありようは同様であり、提言は多岐にわたる。

(1) 飲食ハ、少シ持隠シテ調ヘ可備キ也、心ニ任セテ、迷ヒ調ヘ不可備ズ(九八)

(2) 骨肉ヲ愛タラム父ノ為ニ孝養セム徳ヲ可思遺シ(九六)

(3) 年来ノ妻也ト云トモ、心ハ不可緩(二十四四)

(4) 物忌ニハ、音ヲ高クシテ人ニ不可令聞カ、亦外ヨリ来ラム人ニハ努メ不可会(二十四一八)

(5) 云フ甲斐无キ下藤ノ田舎人ノ中ニモ、此ク歌詠ム者モ有ル也ケリ、努メ不可蔑(二十四五五)

(6) 人ノ為ニハ、強ニ不惠マシキ者也(二十六一四)

(7) 案内不知ザラム所ニハ努メ不立寄マシキ也。況ヤ宿セム事ハ不可思懸ズ(二十七七)

(8) 男ト成ナム者ハ尚大刀・刀ハ身ニ可具キ物也(二十七一八)

(9) 人離レタラム所ニハ、幼キ児共ヲ不遊マシキ事也(二十七二九)

(10) 人何事也トモ、急ト思ヒ廻シテ可為キ也(二十八三四)

(11) 従者トテモ心可免キ者ニ非ズ。況ヤ疎カラム者ノ然ル心有ラムハ此レ必ズ可疑キ事也(二十九七)

(12) 女也トモ尚變所ナドハ拈テ可有キ也(二十九八)

(13) 心有ラム人ハ心ズ恩ヲバ可知キ也(二十九三五)

「莊子」系孔子譚の選択 — 「今昔物語集」巻十への臆説 —

(14) 人ノ不信ニテ口早キ事ハ努メ可止シ(三十一一三)

(15) 人ノ強ノ欲心ハ可止キ也カシ(三十一二二)

(16) 少モ叶タラム人ハ万ノ物ヲバ目ノ前ニシテ體ニ調セタラムキ可食キ也(三十一三二)

これは一部分であるが、人倫の基本にかかわるものから、社会生活のための知恵、あるいは日常生活での留意点などにいたるまで、ふれるところは人生百般におよんでいる。もっとも、だからといって、『今昔物語集』をして「一般衆愚を相手の趣味・啓蒙の書であり、処生・教訓の書である」というわけにはいまい。たとえ全巻にわたつてこの種の教訓がちりばめられているとしても、それはあくまでも従でしかないからである。

ところで、こうした教訓は、いうまでもなく、社会生活に適合し、あるいは身を守るための秩序であり、現象社会での勝利者たるんための、ひとつの手續きにほかならない。したがつて、それはそのまま、『莊子』の主張する「無用の用」の対極に位置する、「有用の用」に相当するということになる。

『今昔物語集』は、『莊子』が批判してやまない儒家の主張と完全には重なりあわないまでも、共通する志向をもつところの、かなり近接した立場にある作品だといつてよいものとおもわれるゆえんである。

『今昔物語集』が心情的に儒家に近い立場に立つ作品であるらしいことは、ほかにたとえば、第九話から第十五話までの、聖賢譚における敬語の使用状況からもうかがわれる。敬語はそこでは、孔子に対してのみ使われている。第九話の童子や、第十五話の盜跖な

どのばあいは使われていなくてとうぜんだとしても、孔子が礼拝をしてうやうやしく見送った第十話の榮啓期に対しても、地の文で敬語は用いられていない。そのみか、孔子とならんで聖賢譚を構成するいま一方の莊子に対してさえ、第十一、第十二、第十三話の三話ともに、まったく敬語は用いられていないのである。聖賢譚の一角をしめる第十四話の費長房についても、同様である。これをもってして、孔子に対する敬語使用の意味するところが察しられよう。単に、聖賢であるとの判断によるものでは、けっしてないのである。

3

道家の思想に同調するどころか、逆に、思想的にも心情的にも儒家に近い立場に立つ『今昔物語集』であつてみれば、『莊子』の側の発想にかかる劣者としての孔子像をとりあげることには、なにがしかのためらいがあつたであろう。孔子に対する敬語の多用や、第九話における馬をめぐる弟子たちとのエピソードの付加などは、そうした編者のためらいを示すもののようにみえる。

たしかに、馬をめぐる弟子たちとのエピソードは、それを付加することによつて、童子にやりこめられる劣者としての孔子から、彼らの才能をいちはやく見出す「智り広キ」孔子へと、同話の孔子像の印象をかえる効果を期待させる。そしてそれはさらに、みずからへの批判を度量に受けとめる孔子像を浮かびあがらせ、次話の、榮啓期を丁重にもてなすのは相手への無条件降伏を意味するのではなく、立場の違う人間の発言にも謙虚に耳を傾けるといふ、孔子の真摯さ、度量さへの賞讃譚へと衣がえの道をひらきもする。

だが、部分的な手なおしで模様がえをはかつてみたところで、本質的な解決にはならない。依然として、孔子否定の思想は生きている。

しかしそれにしても、儒家の伝える孔子譚ではなく、こともあろうに道家の側の発想にかかる孔子譚を、みずからの思想・信条とかならずしも一致しないにもかかわらずとりあげたのは、どのような事情によるのであろうか。考えようによつては、大胆だとも、不注意だともとられるこの措置の背景には、少なくとも『莊子』系の孔子譚をとりこむことの不都合さをしのぐか、または、そうせざるをえない事情があつたとみなければなるまい。

以下は、あくまでも仮定のうえに積みあげる推測にすぎないけれど、『今昔物語集』が『莊子』系の孔子譚をとりあげるについて、どうやら積極・消極の両面があつたようにおもわれる。積極的側面とは、編成上の要請にもとづくところのはなしの内容の評価であり、消極的側面とは、資料の不足である。いうまでもなく、後者は前者に優先する。

すでにあきらかにされているように、『今昔物語集』の巻六、巻七、および巻九の三巻には、『三宝感応要略録』『冥報記』『孝子伝』などの、基幹となる資料があつた。震旦部のこれら三巻は、そうした基幹資料から大部分の材をえただけでなく、表現の細部にいたるまで、忠実にしたがうことを原則としていたといつてよい。もとより、これらのほかにも多数の資料が参照されているし、副資料、または補助資料ともいふべきそうした資料にもとづいているとみられるものも、一方にはたしかにある。が、基幹資料への依存度

の高いことは疑うべくもない。

ところが、卷十は事情が違ふ。そうした基幹資料がないのである。出典研究の現段階でつきとめられていないからといって、基幹資料がなかったといきれるわけではないけれど、少なくとも震旦部の他に三巻のばあいのような、濃密な関係を示す資料の存在した可能性は低いといってよいであろう。卷六、卷七、卷九の三巻は、それぞれ巻の志向するところが明確で内容が単純であるため、同趣向の資料を用いればことたりるが、卷十は八国史Vと銘打つてあるものの、内容とするところは八国史Vの束縛にとられることなく多様だからである。こうした卷十の構成要件を、一ないし二の資料で満たすことは困難なようにもおもわれる。

たとえば今日、間接的ながら卷十の資料の姿をうかがわせるものに「注好選集」がある。この「注好選集」は、既存する上巻と中巻の一部一三話（完本は一九八話）のうちに精粗とりまぜて二三話の類話を卷十と共有しており、さらにそのうちの七話は、他に類話の求められないものと、既知の類話の類似度を越えるものとしてめられている。つまり「注好選集」は、卷十に関して、少なくとも現在までに知られている文献のなかで、もっとも多量に、しかも密度の高い類話を収めているものひとつだといつてよい。

しかし角度をかえていえば、そうした「注好選集」でさえ、主として武人に関する主従・友人・母子・兄弟・夫婦などの情愛を主題としたはなしにかぎって、卷十のなかに七話しか類話をもっていないということになる。「注好選集」は八集Vとしてではなく、個々のはなしの段階で「今昔物語集」の資料につながるものであるらし

「莊子」系孔子譚の選撰 — 「今昔物語集」卷十への臆説 —

いことがみとめられるのであって、八集Vと「今昔物語集」とのかわりには不明ながら、この少なきは留意してよいであろう。

ちなみに、卷十に資料として用いられていることが確実な「俊頼髓脳」も、七話を越えて用いられていることはない。

こうした状況は、いずれも確証となるわけではないけれども、卷十が基幹となる少数の資料によつてではなく、資料間に軽重の差のあまりない、複数の資料によつて構成されたものであることを推想させる条件のひとつではあろう。

さて、基幹資料がないということは、素材の入手についての最低保証を欠くこと意味する。もし卷十に基幹資料がなかったとすれば、類話が多数入手できたはなしもある一方で、ほとんど選択の余地のないはなしもあるといったように、個々のはなしについては、資料面でかなりばらつきのある可能性があるとみなければならぬ。複数の資料をあわせ参照して取捨選択する余裕のあるばあいはよいが、他にとつてかえらる資料のないばあいには、多少不都合とはわかつていても、やむなく目をつぶらざるをえない、という局面もとうぜんありえたであろう。

「今昔物語集」は、内容についてはもとより、表現についても資料に忠実にしたがうことを原則としている。また、組織重視の基本姿勢も一方にはもっている。これは「今昔物語集」の性格を外側から規定する二大原則であった。組織を守るために資料を恣意的に改変することはないし、逆に、資料に支配されて組織原則をくずすことも、「今昔物語集」はしていない。

したがって、ときとして相拮抗するこのふたつの基本方針を堅持

しようとするれば、とるべき方法はただひとつ、手にした資料の多少の不都合には目をつぶるほかないであろう。それはけつして望むところではないが、『今昔物語集』が『今昔物語集』であるためにはそうせざるをえない、やむをえぬ選択だったにちがいない。

4

『論語』や『孔子家語』などは、孔子譚を構成するについてまず参照すべき基礎資料であるばかりでなく、素材源としてじゅうぶん活用しうる内容をそなえている。にもかかわらず『今昔物語集』は、これらを用いていない。

繰り返すことになるが、思想・信条ばかりでなく、心情的にも儒家に近い立場にある『今昔物語集』のことである。もしこれらの文献にふれていたとすれば、組織のうえで多少リズムが乱れるようなことがあったとしても、あえて『莊子』系の孔子譚によることはせず、とうぜん、まっとうな孔子譚を採用したにちがいない。つまり、孔子譚における『莊子』系の採用は、儒・道両系統の資料をあわせ検討した結果として一方が排除されたのではなく、『論語』等の資料はまったく検討の対象にもされない、いわば、資料的な閉塞状況のもとでの決定であることを示唆するもののように、わたしにはおもわれる。

じつさい、巻十の資料収集規模はおおきくはなく、背後にある資料群は、けつして豊富とはいえないようである。今日からすればとうぜんふくまれていてよいとみられる文献で、編者の視野に入っていないかっただけのものも少なくない。たとえば『蒙求』も、そうし

たもののなかのひとつである。

『蒙求』は、流布の状況や内容からみて、巻九の一部や巻十の資料として用いられてよい条件にある。げんに巻九および巻十の両巻と十余話の類話を共有している。けれどもその類似度は、日本古典文学大系本『今昔物語集』が「梗概を記す程度」「出典とするには程遠い」「敷衍したものである」と記しているように、「三宝感要略録」や「真報記」などのそれとは、くらべるべくもないほどかけはなれていて、とうてい出典の座をあたえることはできない。

もっとも、類話のすべてが疎遠なものではなくなかには巻十第十七話「李広箭、射立似母嚴語」に関して早川光三郎氏の指摘するよう^註な、『今昔物語集』と『蒙求』との関係の密なることをうかがわせるかにもえる例もみられはする。が、それらとて直接関係を肯定する材料にはむろんなりえない。

少しく具体的に述べよう。

巻十第十七話は、虎に母を害された李広が、復讐のために野に行き、虎の臥した姿に似た岩を射抜くはなしであり、復讐譚であることとその特色とする。李広の矢が岩をつらぬいたのは、眼前の岩を母のかたきだと信じて疑わない、母をおもう一念のゆえであった。

これに対して、従来出典だとされてきた「前漢書」などは、単に獵に出て岩を射たのだとしているにすぎない。したがってここでは、もっぱら李広の技倆、あるいは集中力が前面におし出されることとなる。同じ岩をつらぬいたはなしではあっても、この差はおおきい。

ところが、ややもすれば後代の改変にかかるかとみられがちな復讐譚も、古注「蒙求」によれば、

広父爲虎所死、広猿臂射、見草中石以爲虎、遂射之没羽、更射之、終不能没石也

とあって、「今昔物語集」の仕出しでないことがたしかめられる。そこで氏は、「李広復讐譚」すべてが古注蒙求依拠として片付ける自信はないが」とことわりながら、それが中国に発するものであることを指摘している。

たしかに、李広の復讐譚は中国に発するものであろうし、この点は「今昔物語集」と「蒙求」との関係の密なることをうかがわせるものではある。

だが、いま一步踏みこんで、李広はだれの仇を討ったのかということになると、「今昔物語集」は八母V、古注「蒙求」は八父Vとしていて、両者は一線を画していることが知られる。なお、「曾我物語」は李將軍の仇をその子が討つことになっており、「今昔物語集」や古注「蒙求」とはおおはばに様相を異にするが、ともあれ討つのは八父Vの仇。「蒙求和歌」では父とも母とも明示せず、八母Vの仇を討ったのだとしている。

こうしたなかにあつて「注好選集」上第七十「李広貫嚴」は、「今昔物語集」と同じく、八母Vの仇を討ったとしている。この事実は、復讐譚であるという点において親近性のみとめられる。「今昔物語集」と古注「蒙求」との関係が、直接的なものではなく、いわばゆるやかな影響関係にすぎないことをあかしする一方で、「今昔物語集」と「注好選集」との距離の近さを、あらためて確認させる

「莊子」系孔子譚の選択 — 「今昔物語集」卷十への臆説 —

はずである。

大学寮の必読書であつた「論語」。文字化されて今日に残されているのは後代のものであるにせよ、「勸学院の雀は蒙求を囀る」の諺を生んだ「蒙求」。外典のうちでは、もっとも利用しやすい部類に属するかとおもわれるこれらが、現実には資料として用いられていない。その一方で、本来ならばとうぜん渡来文献によるのがすじだと考えられる卷十に、俊頼(俊頼)、それもかなり俊頼(俊頼)の屈折の顯著な「俊頼髓腦」が用いられている。いかにも象徴的なこの二点のさし示すところについては、もはやことごとしくふれるまでもあるまい。「今昔物語集」の資料収集能力の限界と、そこからくるところの資料の不足をおいて、ほかに説明はできないであらう。

5

卷十の孔子譚は、あくまでも、「莊子」系の孔子譚なのであつて、「莊子」そのものを「今昔物語集」が資料として用いているというのではない。じじつ、「莊子」と「今昔物語集」とのあいだの類話(類話)は、はなしの内容を同じうしているというだけで、表現はおろか、文脈もまったくかけはなれていて、「今昔物語集」が「莊子」によつていられるとは、とうてい考えられない。

「莊子」はすでに將來しており、ことに八孔子倒れVの諺を生んだ卷十第十五話の原話は、「世俗諺文」にも引用されている。「論語」「孔子家語」「蒙求」ばかりではない。一見出典であるかに見える「莊子」さえも、「今昔物語集」卷十の資料群のなかには入っていないのである。

こうした資料の不足になやむ編者が、聖賢譚の資料として手にしたのは、おそらく、『宇治拾遺物語』型の孔子譚をそなえた文献であつたらう。

たしかに、『宇治拾遺物語』の伝える孔子譚は、卷第十九話の一部、第十話、および第十五話の類話とともに、表現の細部こそ違え、基本的には文脈も一致していて、類似度はきわめて高い。孔子に対する、地の文においての敬語の使用状況まで通じあっている。ただし、使用頻度は『今昔物語集』の方が高い。やや極端な例であるが、『今昔物語集』が多用していることを示す意味で、第十五話「孔子、為教盜跖行其家怖返語」の末尾と、『宇治拾遺物語』第一九七話「盜跖と孔子と問答事」とをあわせかかげる。

今・孔子、亦、可云キ事思エ給ハザリケレバ、座ヲ起ヲ忿ギ出テ給
又。

馬ニ乗り給ニ、吉ク恐レ給ヒニケレバ、轡ヲ二度ビ取りシ
證ヲ類ニ踏ミ誤テ給フ。此トヨ、世ノ人、孔子倒レシ給フト云
フ也ケリトナム語り伝ヘタルトヤ。

字・孔子、また云べきことおぼえずして、座をたちて、いそぎ出
て、馬に乗給ふに、よく臆しけるにや、轡を二たびとりはつ
し、あぶみをしきりにふみはずす。

これを、世の人「孔子倒れず」と云なり。

わずかこれだけの部分に、『今昔物語集』は八給ふを六回も用
いている。そのうちで「宇治拾遺物語集」と重複するのは、くく線
をほどこした一例のみ。他は『今昔物語集』の付加した可能性があ
るわけである。右に示した部分にかぎらず、『宇治拾遺物語』が敬

語を用いていない個所に『今昔物語集』が用いている例はほかにも
あるが、逆のばあいは一例もない。『今昔物語集』の、孔子に対す
る思い入れのなみなみでないことが、ここからもうかがわれよう。

それにしても、大宝元年以来、ときに中止されることはあつても、
原則として春秋の二回釈奠がおこなわれ、また養老令によつて『論
語』が大学寮での必読書とされるという、つまりは公の支持を儒家
がえている一方に、『莊子』系の、孔子を批判したはなしの流れが
あつたのは興味ぶかい。孔子が、もっぱら崇敬の念をもって語られ
るようになるのは、どうやら、『十訓抄』『古今著聞集』『三国伝
記』『私聚百因縁集』『沙石集』などの、中世の説話集の出現をま
たなければならなかつたようである。なお、これらの作品には、莊
子はとりあげられていない。孔子の比重の増加が、莊子の比重の低
下と連動していることを示す例証といえようか。

『莊子』系の孔子譚は、あくまでも『莊子』系の孔子譚なのであ
つて、莊子と並列させて聖賢譚を構成する孔子側の素材としては、
いかにも適切さに欠ける。しかも、『今昔物語集』の思想的立場と
も、それは距離をおいている。にもかかわらずこれが採用されたのは、
すでに述べたように、資料不足のなかでの、聖賢譚の設定とい
う編成上の要請にこたえるための、やむをえない選択によるものだ
と解するほかないであろう。

ただ、孔子譚の採用は、第一義的には、こうした消極的要因によ
るものと解ざるをえないが、同時に、『莊子』系孔子譚のもつはな
しとしてのみずみずしさ、あるいは、説話配列上の有効性の評価と
いった積極的側面があつたこともじゅうぶん推測できる。まっとう

な、孔子譚でないゆえをもって、また、おのれの思想、信条と異なるゆえをもって、ただちに排除させないだけの生命力を、「莊子」系の孔子譚はたしかにもっているのである。

編者の八やむをえぬ、おもいには、悔恨の情ばかりではなく、現状肯定の意もなにかはふくまれていたにちがいない。

注1 片寄正義『今昔物語集論』 四九頁

注2 毎日新聞（昭55・7・2）によれば、東寺勸智院で完本が発見された由である。全貌はまだ公にされていない。

注3 『蒙求』（新釈漢文大系）上 二頁

注4 「下和が血の涙」と題する別稿（『和歌文学の周辺』八近刊）でふれる。

注5 『俊頼髄脳』が資料として用いられていることを理由に、

『今昔物語集』の「取材面における制約」を、今野達は早くに指摘している（『今昔物語集の成立に関する諸問題』

解釈鑑賞、昭38・1）